

A・ビュージーヌ『ヴェルレーヌ』

岡, 由美子

<https://doi.org/10.15017/10032>

出版情報 : Stella. 19, pp.153-156, 2000-09-05. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

A・ビュイジーヌ『ヴェルレーヌ』

岡 由美子

アラン・ビュイジーヌは1992年、モンペリエのファーブル美術館で開催されたフレデリック・バジール展において1枚の肖像画を目にする。『トゥルバドゥール姿のポール・ヴェルレーヌ』と題されたこの肖像画こそ本書『ヴェルレーヌ——ある肉体の物語』¹⁾ 執筆の動機となったのだが、それは彼がキャンバスのうえに「時間と放蕩によって恐るべき荒廃を被る以前の、いまだ無傷のまま保たれた」詩人の「顔」を認めたからにはほかならない。ところで、ヴェルレーヌの「醜さ」については数々の伝記においてくりかえし語られてきた。ルペルチェの母は息子の親友を「植物園から逃げ出してきたオランウータンそっくり」と形容し、またある女性ファンは帽子をとって笑いかける詩人の顔を見るや気絶してしまったといったように、何しろヴェルレーヌの「醜さ」にまつわるエピソードには事欠かないのだ。そして同性愛をはじめ、彼の生に対するあらゆる消極的姿勢は「醜く」生まれついたコンプレックスに起因しているといった解釈が堂々と繰り広げられてきたのである。

「軽やかさと力づよさの矛盾にみちた混合」が表れているという肖像を、われわれも「マガジーヌ・リテレール」誌によって目にする事ができる²⁾。それが1868年におけるヴェルレーヌの真実の「顔」かどうかという点については多少の疑問が残るものの、詩人の肉体的「醜さ」を生来のものと決めつけるなら、肉体は単に詩的魂の美しさ・崇高さをアンチテーゼとして強調するという消極的役割しかもたず、彼が試みてきた詩的表現の可能性を狭めて解釈してしまう恐れがあるだろう。じじつクローデルによる評論に代表されるように、従来のヴェルレーヌ研究は「純粋な詩的靈感を、それが宿ったということじたい奇蹟ともいえるほどふさわしからぬ不潔漢から細心の注意をはらって保護し、考察の対象となる詩作品を詩人の肉体から救い、作品の崇高な真髄を、俗悪で汚辱にまみれた生から保護」することに終始してきたのである。

本書の試みはこういった立場とは決定的に袂を分かつものだ。ビュイジューヌによれば、ヴェルレーヌの肉体は何よりも「ボディアート」の稀有な実験の場であり、アルコール中毒も同性愛も芸術のために最大限に体を張って犯されたりリスクにはかならない。つまり肉体が「克服し乗り越え超越すべき障害であるどころか、詩作のための可能な唯一の手段、実験の唯一の道具、かけがえのない実験室」であったヴェルレーヌにおいては、崩壊していく肉体をさらけ出すことこそ、詩的行為を構成する不可欠で決定的な要素のひとつだったのであり、肉体そのものが詩的考察の対象となりうるのである。

このような視点から本書は、ヴェルレーヌの生涯の物語にいくつかの新しい解釈を提出している。たとえば、ランボーに発砲し逮捕されたヴェルレーヌは同性愛の習慣を確認するために屈辱的な身体検査を強いられたが、従来の伝記においてそのさいの記録がはっきりと示されることはなかった。たしかに「証拠」はヴェルレーヌの肉体の特徴を解剖学的事実としてつぶさに記録したものであり、一見したところ詩人の生涯を描くうえで不可欠の資料とはいいいがたい。それでもビュイジューヌはあえて手をくわえずにこの記録を掲載することで、詩人が置かれていた悲惨な状況と彼の悲嘆を知らしめると同時に、「詩の実験に純粋に熱中するあまりなされた肉体上の挑戦」を正面から見すえることを読者に要求しているのである。

ヴェルレーヌの飲酒にかんしても新たな見解が示されている。詩人の度を越した飲酒癖についてはこれまで祖父や曾祖父のアルコール中毒を引き合いに出し、遺伝的に語ることで片づけられてきた。これに対し、彼の飲酒を単なる「宿命」ではなく、詩的試みと不可分の実存的選択であったと見なすのが本書の立場である。ヴェルレーヌ晩年の回想録『告白』には幼年期における熱病の体験が語られているが、伝記作者はこの体験こそ「無」「消滅」「消失」といった初期詩編に特徴的なイメージの母胎であったと捉えている。しかもこういった自己消滅の願望は、熱病にきわめて類似した飲酒の効果——詩人自身が両者の共通点を指摘している——によって一時的に充足されるのである。したがってヴェルレーヌ詩の独自性が廃れていくにつれてアルコールへの依存がますますひどくなっていったのもけっして偶然ではない。アルコールはヴェルレーヌの詩的インスピレーションを枯渇させたのではなく、詩に代わっていっそう実存的な方法で同様の効果をもたらしていたといえるのである。

ところで周知のように、晩年のヴェルレーヌは連日のようにカフェに姿を現わし、カルチェ・ラタンの有名人となっていた。ビュイジーヌは、カフェに腰かけアプサントをあおることも詩的行為のひとつであったと主張する。つまりヴェルレーヌは自ら選択した運命として「呪われた詩人」の生を引き受け、薄汚れた身なりや病にむしばまれた悲惨な肉体をたえず人目にさらすことによってそのことを知らしめていたというのだ。こうして詩人は自らの伝説を作りあげ、肉体を詩的コーパスに変えることができた。と同時に、社会的に成功した詩人たちに良心の呵責を植えつけることもできた。また 1886 年以降合計 1,309 日間にわたって収容されていた病院も、彼にとっては「詩的創造の特権的風景」であった。「ヨードホルムやフェノールのあせた匂い、病人たちのうめき声や瀕死者のあえぎが、詩人の呪いを存分に耕してくれる理想的な環境をつくっていた」からである。病院のなかでヴェルレーヌは「病に冒され、傷つけられ苦悶する肉体の側、社会にとっての落伍者の側」に身をおくことで本質的に詩人たりえたのだ。

かくして晩年の 10 年間に描かれた、あるいは撮影されたヴェルレーヌ像の数が加速度的に増加しているのも不思議な現象ではない。晩年に訪れる詩人としての栄光は、彼の肉体のイメージと切り離しがたく結びついていたのである。しかしながら「肉体の荒廃ゆえに、いっそう神聖化され、栄光に包まれていた」と同じ時期に、「呪われた詩人」の伝説から逃走すべく、「名誉回復」のための巻き返し——アカデミー・フランセーズへの立候補——が試みられていた事実も忘れてはならない。ヴェルレーヌは荒廃した生を立て直したいという強い願望にとらわれるたびに、自らのポートレートを友人たちに贈っていたが、立候補のさいに撮影された肖像もそれらの写真と同様の意味あいをもっていったといえる。「ヴェルレーヌにとって詩人というものはその容姿と切り離すことはできない。すなわち詩人の精神の更正は必ず肉体の更正をとまらうて現れる」のだ。シルクハットにマフラー、毛皮つきコートを身にまとい、杖に寄りかかった詩人の姿は、現代のヴィヨンなどではなく身持ちのよいブルジョワ詩人でありたい、そして他者の目にもそう映りたいというヴェルレーヌの願望の具現にほかならなかったといえる。

「それじたい詩であろうとしたひとつの肉体がたどった道程、経てきた出来事はできるかぎりすべて取り上げる」という原則にもとづいて、本書に盛られ

た詩人の肉体にかんするさまざまな資料には必然的に詩作品そのものと同等、もしくはそれ以上の重要性が負荷されている。たしかにヴェルレーヌ的「ボディアート」の変遷を語る資料はたいへん興味ぶかいし、詩人伝にもかかわらず詩編の引用が極端に少ないのも著者の戦略からすれば当然の選択というべきなのだろう。しかしながら、本書が「ボディアートの実験の場」としての肉体を重視するあまり、ヴェルレーヌが何よりも「書く」肉体であったことをときとして忘れさせてしまうのもまた否めぬ事実である。詩作行為こそがヴェルレーヌをヴェルレーヌたらしめていたのであり、彼の肉体の存在証明でもあった、この点はずねに念頭においておくべきだろう。とはいえビュイジーヌの野心的な試みが、退廃した肉体から詩人を救おうと躍起になってきたこれまでの伝記的研究に大きな一石を投じたのはまちがいない。副題が示唆するとおり、本書は「肉体」を詩的行為との不可分な連関のもとに描き出そうとする、まさに「肉体の書 *corpographie*」なのである。

註

- 1) Alain BUISINE, *Verlaine. Histoire d'un corps*, Paris : Tallandier, coll. «Figures de proue», 1995, 543 pp.
- 2) Voir Alain BUISINE, «Les visages du poète», *Magazine littéraire*, n° 321, mai 1994, p. 19.